第 5 号

日本・地域経営まちづくり塾　ニュースレター

平成 25 年 10 月 25 日

目次

1　はじめに
1　岡田先生あいさつ・講義
3　受講生からの提案
4　東日本大震災の現地からの発言
6　視点・観点・気点
6　まとめ

はじめに

第 1 回日本・地域経営まちづくり塾短期集中認定プログラムコース 1 日目（第 5 回日本・地域経営まちづくり塾）が平成 25 年 9 月 21 日（土）に京都大学おうばくプラザにて開催されました．

午前は冒頭で，塾頭の岡田先生より本塾開塾の趣旨，本塾の特徴および現場で培われたまちづくり論についての講演がありました．その後，岡田先生の話を受けて，大澤様より受講生として考える，先生徒方式である本塾への取り組み方についてお話頂きました．

午後は，東日本大震災の現地からの声として，福島から避難されてきた西山様より京都での避難者コミュニティの活動と被災者の願いについてお話頂き，最後に，寺谷様より「視点・観点・気点」と題して思考のデザインについて話がありました．

スケジュール

10:00～10:15	開講の挨拶	塾頭　岡田憲夫先生
10:15～11:00	鳥取県智頭町の 30 年の事起こしと地域経営まちづくり論の紹介	塾頭　岡田憲夫先生
11:00～11:20	受講生からの提案「枠を外して」	大澤文子氏
11:20～12:30	グループ討議「地域経営まちづくり・小さな事起こし」	
13:30～14:30	東日本大震災の現地からの発言「今，私達の地域はこうなっています」	西山祐子氏
14:30～15:30	グループ討議「被災地と繋がる・小さな事起こし」	
15:45～16:15	思考のデザイン「視点・観点・気点」	寺谷篤志氏

開講あいさつ・地域経営まちづくり論の紹介

塾頭　岡田憲夫

本集中講義は，「地域経営まちづくり塾」の一部を構成するもので，本塾の基礎となるところを集中的に学ぶ場として位置付けられている．特に，本塾に年間を通して参加することのできない人達に対して特別の集中体験の機会を提供するものでもある．本塾は塾生一人ひとりにとっての「帰って来れる港のごとき“基盤となる学びの場”であり，本塾，そしてこの集中講義自体が事起こしであることを感じてほしい．本塾の起点は東日本大震災であることを常に胸に刻んでいてほしい．東日本大震災という文明史的出来事を我々は風化させてはいけない．

生徒も先生，先生も生徒という「先生徒方式」が本塾の特徴であり，本塾はお互いに学びあう場となっている．

本塾の運営精神は「先生徒」，すなわち生徒も先生，先生も生徒，ということである．ここでは先生というよりは先達，生徒というよりは後輩であるように考え，先に立つ人としての先達は後輩よりも何かを知っていることが期待される．例えば，本塾の先頭に立つ私，寺谷，平塚について話すと，これまで三人とも半端な覚悟でなく，それなりに一芸を求めてきたが，さらにその一芸を超えるために後輩と分かち合い，後輩から学びたいと思っている．他芸との交流，そしてさらなる挑戦を本塾で楽しんでいきたい．その中において，自身が心底伝えたいと思うことをいかに他者に的確に伝えるかということが重要だ．このことを心にとめておいてほしい．先日のオリンピック招致プレゼンにおいて，首相の発言に「under control」という言葉があった．首相は心底それが伝えたかったのだろうか? ともかく，これから日本はこの言葉に支配され，世界から監視されることになるだろう．私はことば［言葉×感性（観性）］の力を信じている．本塾には，地域経営まちづくり実践士として到達段階毎に認定制度がある．認定者は認定されたレベルを自覚し，社会に対して認定者としての責任を意識して日頃の現場で実践してほしい．

さて，私は約 30 年智頭町での活動を通して，まちづくりを極めるためには「光の 3 原色」ならぬ「まちづくりの 3 原色」が不可欠だと確信するに至った．それについて少し説明を加えたい．赤色は「伝統的都市計画・農村計画」，つまりは行政主導型のアプローチである．次に青色は「一人からでもできるマチを変える事起こし」であり，つまりは地域経営まちづくりである．ここでは個人・有志主導・ボトムアップという特徴が見える．そして緑色は「持続可能なマチを設えるアプローチ」であり，成長の質・ライフスタイルの多様性・持続可能性・生存可能性のリスクを考慮したアプローチとなっている．3.11 で問われたことというのは，この三色のアプローチのバランスと見合いなのである．智頭町に関しては，行政依存で自ら決められない，変えられない地域からの自己改革運動（漸進的・適応的社会革新運動）を進めてきた．その草創期が CCPT（Chizu Creative Project Team）の地域活性化運動である．智頭町では色々なことがあったが，ここで寺谷さんから少し話をしてもらおう．

まちづくりのアプローチは光の 3 原色に例えられ，赤色「伝統的都市計画・農村計画」，青色「一人からでも出来るマチを変える事起こし」，黄色「持続可能なマチを設えるアプローチ」である．この 3 原色に対して，どのようにして光をあてるか，それでマチのカタチは大きく変わってくる．

寺谷　私が帰郷した昭和 58 年頃，智頭町では「江戸時代」が続いていた．つまり貧富の差により，貧しい者の意見は通らなかった．そういった地域の現状に公憤を覚え，何とか変えようと活動した．皆で話し合うときに心がけてきたことがある．例えば，議論をすると，必ず提案は批判に負ける．このような構図では何も変わらないので，徹底して批判には聞く耳を持たなかった．傲慢かもしれないが，変わろうとするには時に強引さも必要である．また，よく話す人や地位のある人の話よりもむしろ普段あまり話さない人から“ポッ”と出た意見を意図的に取り入れた．

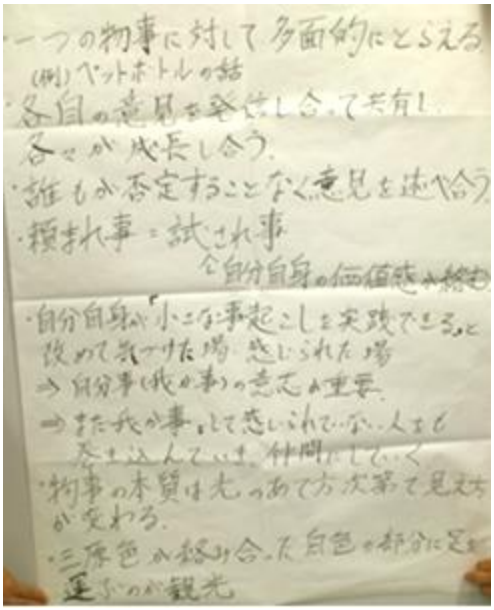
私はささやかでも身近な地域社会を良い意味で変える気概と覚悟をもって行動している．「これはおかしい」と思うなら行動すべきである．問題を感じ取るためには，自ら動き，積み上げていくことが大切である．

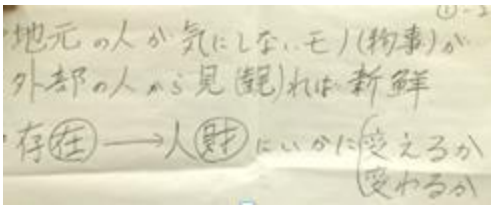
岡田　まちを作るということは光を当てることである．虫が光の方向を向くように，光を当てることがコミュニケーションの誘い水となる．まちづくりの混合色はいきなり作れない．まずは三原色を取り出してみせ，色々な色を組み合わせて見せていくことが必要である．

（敬称略）

受講生からの提案　~枠を外して~　　塾生　大澤文子

人財となる人は，考えの枠を外せる人である．もしも大災害に遭った際に自分の手元にペットボトルがあったとすると，「ペットボトルしかない」ではなく「ペットボトルがある」と捉えることが重要である．枠を外す実践が，私達に求められている．





ディスカッションの内容
（一部）

岡田先生から皆の前で話すよう依頼されたとき，私は「岡田先生に試されている」ということを感じ取りました．「頼まれ事は試され事」ということです．また，私に与えられたこの機会は皆さんが私の行動を評価する場であると同時に，私自身が私の行動を評価するきっかけにもなると考え，この場に立っています．

さて，私は岡田先生の話をどう解釈したか，そして聞いた内容を自分の中にどう落とし込んだかをお話ししようと思います．岡田先生は先程，塾を立ち上げた理由を説明して下さいました．その理由を読み解くキーワードは，お手元のプログラムにちりばめられていると私は考えています．

1 つ目は「あなた自身が主人公」．これは誰が主体となって行動すべきかを示しています．

2 つ目は「小さな事起こし」．これは実践することの大切さを訴えています．

3 つ目は「地域を何とかしたい」．これは目の前にあることを我が事として捉え，自分はどうしたいかを考えるよう訴えています．

4 つ目は「どうしたらよいか」．これは四面会議といった具体的な方法のことを示しています．

これら 4 つの問いかけに対して，私たちはこの塾で何ができるのでしょうか？私はここを「学びの場」と捉えています．各人が一人でもできる事起こしを実践し，この場で互いの経験を分かち合い，それを糧にして学んでいく．そうやってみんなで学び，答えを埋めていく場だと，私は考えています．

では，私たちが 3.11 にこだわる理由とは何でしょうか？私たちはあの日，一瞬にしてまちが崩れ去る様子を目の当たりにしました．その光景から，私たちは動かざるを得ないという現実を感じ取ったのではないかと思います．3.11 は，いつ何時我が身に災いが起こるか分からないということ，そしてそのとき自分は何ができるか，ということを私たちに問いかけたのではないかと考えています．いつまでも他人事のままではいけないのです．

だから私たちは実践士として立ち上がろうとしています．実践士は人財としての人となりが問われます．

では，必要とされる人財とはどういったものなのでしょうか？それは枠を外して考えることができる，柔軟な発想と価値観を持った人です．例えば，ここに水の入ったペットボトルがあります．皆さんはこの使い道をいくつ思いつきますか？その際重要なことは，例えば災害時において「ペットボトルしかない」と考えるか「ペットボトルがある」と考えるかの違いです．私たちに求められるのは後者の考え方です．そういった考え方ができる人財になるべく，私たちはこの場に集まりました．先生と生徒という枠を外して，互いが自分の意見を言い合い，学んでいく．この塾では，自分の価値観にとらわれず，枠を外すことが求められているのだと感じています．

【ディスカッション】「感想の共有・小さな事起こし」

岡田先生と大澤さんの話を受けて，自分たちに出来る事起こしについてグループディスカッションを行いました．「相手にとっての価値観を考え，とにかく実行に移すことが重要」だと，皆が感じている様子でした．

東日本大震災の現地からの発言 ~今，私達の地域はこうなっています~

「避難者と支援者を結ぶ京都ネットワーク みんなの手」代表 西山祐子

皆さんは福島県福島市を知っていますか．「うつくしまふくしま」と「本当の空がある福島」というキャッチコピーのように自然豊かだった故郷は，放射能により汚れてしまいました．

まずは，震災後の私達避難者の行動について話したいと思います．3 月 11 日，福島市は震度 6 弱の長い揺れがありました．震災後は店も閉まり，交通も不通，断水が続きました．13 日に友人からメールが回ってきました．お医者さんが書かれたと思われるメールには，「福島が危険である．とにかく西へ逃げなさい．」ということが書かれていました．テレビをつけない生活でしたので状況を把握できていませんでしたが，放射能対策の情報が事細かく書かれた内容から真実だと感じ，避難を考え始めました．14 日は娘の誕生日を精一杯祝おうと誕生会をした後，避難について家族に相談しましたが，国や県などから避難指示も無い中でなぜ避難する必要があるのかと大反対を受けました．しかし翌日，三重に避難した知人からの「娘を『被曝』させてどうするの．」という一言で，避難の決意が固まり，両親を説得しました．18 日に福島空港から東京に向かうにあたり，故郷を離れる悲しみで自然と涙が出てきました．後日，3 月 15 日に北西方向への風で福島市内でも放射線量が上がったことが分かりました．事前に予測していたと言われていますが，もしこの情報を公表されていれば何か対策をとれたのにと悔やまれます．東京ではアパートを借りて生活していましたが，指定区域外の私達は自主避難者として行政からの支援は受けられませんでした．5 月に一度福島に戻りましたが，除染が進んでも場所によっては線量が高く，安心して外で遊べません．室内に砂場が完備された幼稚園などもできましたが，子どもに普通の暮らしをさせてあげたいと思い，戻ることは断念しました．しかし，東京での暮らしを継続することは難しく，行政の支援が得られる京都に避難することにしました．京都は岩手，宮城，福島，茨城，栃木の避難者約 1000 人を国家公務員宿舎を使って 4 年間無償で受け入れておられ，その多くの方は母子避難です．この頃，福島の，検査を受けた子どもたち 36 万人中 12 人に甲状腺ガンが見つかったと報道されました．被害は終わりではなく，何も始まっていないのが現状です．

11 月に避難者有志の会を立ち上げました．公務員宿舎では誰が避難者か分からず，個人情報を教えてもらえません．そこで，ポスターを張り，集会を開き，それからメーリングリストを作るなどコミュニティづくりを始めて，お互いに情報を共有しました．メディアにも取り上げられ，支援の申し出が相次ぐようになった頃，「ここでは物資も集まってきて，いいわよね」と宿舎外に住む避難者の方から言われた一言をきっかけに京都の避難者と支援者をつなぐ取り組みをしようと，「みんなの手」を発足させました．発足後，子どもたちから「友達や親に会いたい．だから福島に帰りたい」という声が多く聞かれました．そこで，福島に住む親や祖父母が京都に来て，子どもや孫に会ってもらう「家族再会プロジェクト」や，福島・京都で分断された同級生が京都で一緒に思い出を作る「同級生再会プロジェクト」を実施しました．家族再会プロジェクトではこれまでに 4 本のバスを走らせており，アンケートで「このイベントがあるから京都に避難してきた」という意見もありました．

福島県民がバラバラに分断されたことが一番悲しい．分断された状態の中でも，福島県民共通の願いは「震災前の様な暮らしを取り戻すこと」．一人ひとりに福島の現実を直視し，自分事として捉え，自らできることを考え，その考えを行動に移してほしい．

ニュースレターで情報発信もしています．最初は物資，長期化するにつれて精神的なサポートというように支援のニーズも多様化し，対応が難しくなっています．一方で，避難者の保護に近い支援を続けると自立できなくなると思い，今後は自立に向けた後押しを目指しています．また，ここに残る選択をしたときに避難者同士の他に，地域の人との繋がりを作れるようにコミュニティづくりとして「みんなのカフェ」をオープンさせました．避難者の就労支援も行い，パソコン教室を 2 階で開催しています．

最後になりましたが，私は京都に来てから 2 年半で 100 回以上もこのような場でお話をさせてもらっています．皆に知って頂きたい一心からです．私は国や東電への怒りはありません．各々が守るべきもののために戦ったと思っています．ただ，全てが一瞬のうちに無くなった．形あるものは残っているが，線量が違い，故郷が汚されてしまった．川で遊ぶ，芝で寝転ぶ，干し柿を作る，そういった当たり前のことができなくなったこと，継承してきたものが一瞬で無くなったことの悲しみだけがあります．帰るところがないという思いを他の人達に味わってほしくない．今後は持続可能な社会づくりが必要であると思います．自分だけが良ければいいのではなく，先代から受け継いだ，安心した，住み良い日本を次の世代に引き継ぐために一人一人がしなければならないことをすることが大事だと思います．

【ディスカッション】　「感想の共有・被災地と繋がる小さな事起こし」　（一部紹介）

〇公共機関の発表が正しいと思っていたが，現地の人が考えていることも事実であることを実感．
〇被災地からの生の声で知り得なかった事実を知った．→自分の周りに広めることも事起こしの一つ．
〇被曝量は分からない（誰の主張が真実かわからない）．
〇継続してできる支援は何か考えたい．
〇知ろうとすること，関わろうとすること，それ自体が事起こし．出会いも事起こし．
〇怒り，悲しみの感情の生まれる違いは何なのか．→一人一人がどう感じ，考えているのか．
〇被災者の要望を聞いて回るなどをこれまでにしておけばよかった．
〇現地に行くだけでも元気を与えられる．
〇「みんなのカフェ」，会津酒を飲む会にみんな（一人でも）で行く
〇福島へ出かける
〇避難者との交流をする（話を聞く，方言を教えあう，自然な関係を築く）．
〇被災地の情報を伝え続ける（現状は変化している）
〇情報は自ら発信するもので，待つものではない．
〇善意の一方通行を防ぐ
〇コミュニケーションの場，心を通い合わせることが必要．

最後に西山さんから…

この 2 年半，自分がどう生きていこうか考えて行動してきました．また，脱原発の活動もそうですが，政治的な活動にすれば他の目的に利用されていることもあります．地域を経て誰にでも受け入れてもらえる会にしたいと思っていますので，私はできるだけ政治的な活動にならないよう心がけました．

宮城，福島では隣接しながらも放射能に対する意識の違いがあります．福島県民でも，残って暮らす人と私達のように避難する人もいます．避難している私達からすれば，福島のモノを食べて支援なんて考えられません．

震災によって，何が一番悲しいか．故郷が汚れたことも悲しいですが，一番は福島県民が分断されたことが悲しいです．補償の違い，避難の違い，分断され，バラバラになり，誰に訴えればいいのかも分からない状態です．私達の一番の願いは，3.11 の前の福島の暮らしを取り戻してほしいということです．本気で被災者に寄り添ってくれるなら，世界の英知を絞ってロングタームの目標を立てて，実行に移してほしいと願っています．

思考のデザイン　~視点・観点・気点~　　寺谷篤志

今回，「思考のデザイン」というテキストを出版する事になった．その動機は，「手前みそでは何の意味もない，意味のあることをしたい」という思いである．これまでやってきた智頭町での活動を通じて培った自分の考え方や，思考の仕方の絵解き図をまとめて 1 冊の本にした．この原稿をある出版社に投げかけており，そこで「社会に問える力があるかどうか」という答えが出ると考えている．本書で絵図を用いたのは，複雑多岐な現代社会を読み解く上で，絵図が有効な方法ではないかと考えたからである．ここで，本書の内容について一例を紹介する．

自己の社会的立ち位置（自己と他者との関係性）について，「人と人は一点の概念」（P22）で示している．これは一人一人を円（球）として見ると，たとえ仲が非常に良い夫婦であっても，その触れ合う点は接点の一点のみと考えている．なぜなら，それぞれの考える前提も経験も違うからである．全ての価値観がぴったり一致するというのは幻想にすぎず，それを理想として追い求めてもしんどくなるだけである．また，全ての価値観が一致せずとも，1 点のつながりさえ有れば，大きな力が発揮できる．これは，「2 の n 乗則」という概念である．1 の n 乗は常に 1 であるが，2 の n 乗は無限大に広がる可能性を秘めている．これは自分のことを理解し，認めてくれる人が一人いれば，力が増すことを意味する．このことは，他者との関わりの中で 1 対 1 の関係を大切にすることに他ならない．一人の他者と本気で向き合い，共感して価値観を共有する事が，パワー倍増の源になる．自分自身の身の回りに 1 対 1 の関係を多く築く事が出来れば，より大きな力が発揮できる．

絵図は見る人の前提によって，それぞれ理解の仕方が違う．その違いを認め合うことこそ，集団力を引き出すことになると考える．他者との出会いにより共に育む関係を築き，物事の本質を捉え続けてほしい．

智頭町活性化プロジェクト集団（CCPT）活動実践提言書を示し，講演する寺谷氏

まとめ　岡田憲夫

福島で起こったことは「今後，どういう人生を歩んでいくのか」という非常に重たい問いを投げかけている．今回の西山さんのお話で特に響いたことは，「生きるということは，命だけでなく，生活することでもある」ということだ．命あってこその生活だが，英語では life という言葉が両方をさしており，命と生活は一体と捉えられている．また，日本でも昨今 QOL というが，これは生活の質という意味でもあり，ターミナルケアの質や人生の最後の迎え方という意味で使われている．命と生活の両方の大切さが訴えられている．またもう一つ，命，生活以外に「生き様」ということもある．自分が背負うもの（自負心，プライド）を感じて生きたい，生きて欲しいということ．普段の生活では生き様を意識しなくとも過ごせるが，いざという時に「生き様」が問われる．3.11 は，一人一人に「命・生活・生き様を如何に守り，如何に創るか」を問うているのではないか．

編集後記

非常に内容の濃い短期集中認定プログラム一日目であったと思います．今まで私は東日本大震災（特に福島原発事故）がもたらした悲しみを全く理解していなかったことに気づかされました．西山様のお話を通じて，ふるさとが汚された悲しみ，ふるさとに帰れない悲しみ，ふるさとがバラバラになった悲しみがひしひしと伝わってきました．今後も「被災地と繋がる小さな事起こし」について考えていこうと思います．また，大澤様のお話にあった「頼まれ事は試され事」という言葉を胸に様々な事に挑戦したいと思いました．（谷本隆介）